



Title	刊本『枯尾華』校合
Author(s)	今泉, 準一
Citation	明治大学教養論集, 146: 27-40
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/12158">http://hdl.handle.net/10291/12158</a>
Rights	
Issue Date	1981-02-28
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

# 刊本『枯尾華』校合

今 泉 準 一

## はじめに

前に刊本『五元集』の校合作業を中間報告と題して、本誌に発表したが、各方面の方々から多くの御教示を賜わり、この御恩恵から非常に多くのことを知り得た。ここにあらためて御礼を申し上げる次第であるが、今回もまたできる得るなら、これを機に御教示を得たい気持ちからあえてこの一稿を草してみた。

現在までに披見し得た刊本『枯尾華』は、国文学研究資料館のマイクロ資料中の紙焼本およびフィルムによる三本を合わせて二十五本である。所在が知られていて現在までになお未見のもの、また推測し得るそれ以外の存在を考えると、これに数倍する現存刊本の数を推定し得るから、以下の記述もまたまったくの中間報告ということになる。しかも前回の『五元集』の場合よりも、刊本の流布のすくない関係もあってか、披見刊本数もすくなく、また披見に要した日数もすくなく、しかし一応の結論だけは得られたので、上述の微意をかねて以下これについて述べてみたい。

一

刊本『枯尾華』は、A群、B群と二分類が可能である。

A 群に属するものとしては公共機関の所蔵本披見順に列挙するとつぎのようになる。

1 東京都立中央図書館加賀文庫本(七七〇五・九一一・K)

2 聖心女子大学図書館本(和・九一一・三二・一・M八五E)

3 天理図書館綿屋文庫本A(わ七二・三九)

4 同 B(わ七二・四〇)

5 同 C(わ七二・四三)

6 同 D(わ七二・四四)

7 早稲田大学図書館本A(へ五・二〇九五)

8 同 B(へ五・四四三一)

9 駒沢大学図書館本A(沼・九三一A・二)

10 国文学研究資料館・武雄市鍋島(D―一五八)

11 同 高岡中央図(50・二七・七)

また、個人所蔵のものとしては、

12 今泉本

がある。

B 群に属するものとしては、公共機関の所蔵本としては

13 東北大学図書館本(狩・第四門・一一〇九二)

14 天理図書館綿屋文庫本E(わ七二・四一)

15 同 F (わ七二・四二)

16 同 G (わ七二・五四)

17 早稲田大学図書館本 C (へ五・一八五三)

18 同 D (へ五・一二四七)

19 駒沢大学図書館本 B (沼・九三一・一)

20 国文学研究資料館・蓬左文庫 (四八・一三三・六)

21 富山県立図書館志田文庫本 (SH三・四三)

22 西尾市立図書館岩瀬文庫本 (七五一六・一〇一・一四六)

また個人所蔵のものとしては

23 西郷氏本

24 保坂氏本 A

25 同 B

がある。なお、これらの1と25のうち、3および12は上巻のみ、また11は下巻のみの存在で、他はすべて上・下二巻から成る。また3は大本、他はすべて半紙本。

## 二

A群とB群との相違のうちの顕著なるものを挙げる。

○上巻二丁表五行目二字目「我」の左下に返り点「一」がA群のすべてに認められるが、B群のすべてにこれがない。

○上巻三丁表三行目の最後の字「譬」の右下に送り仮名「へ」がA群のすべてに認められるが、B群のすべてが「譬」の草書体の最後の筆先と「へ」とが癒着している。

○上巻三丁裏六行目下から二丁目「知」の右下につきぎの字「利」との音読連結記号の堅棒が、A群ではある本では鮮明にまたある本はかすれてではあるが明らかに認められるのに対し、B群にはすべてまったく存在しない（保坂氏本Bの不明を除く）。

○上巻六丁裏四行目最後の字「る」の変体仮名がA群ではすべて明らかに「る」と読めるが、B群は最後の筆の部分が消滅して「る」と読むには困難である。

○上巻廿五丁表三行目「くらつほに小坊のるやと」ある「坊」と「の」との間の右に、A群はすべて「主」の字が添えられてあるが、B群はすべてこれが欠落している。

○下巻七丁裏三行目最初の字「香」にA群すべて、音読記号の横線があるが、B群はすべてこれがない。

○下巻十二丁裏六行目十字目「鈍」の振仮名がA群はすべて鮮明にあるいはかすれを見せてはいるが、「トミ」とあるのに対し、B群はすべて「トン」とある。

○下巻十四丁裏九行目最初の字「旅」の右上にA群は何も記されていないが、B群はすべて「二」の細字がある。

○下巻十七丁裏五行目十一丁目「昨」がA群はすべて「日」の最初の画があるが、B群はすべてこれが欠落している。

○下巻十八丁裏九行目、句の最後の字「絹」の振仮名がA群は鮮明・不鮮明の相違はあるがすべて「ケン」と読めるのに対し、B群はすべて「ケレ」とある。

○下巻十九丁表三行目、最初の字「檻」の右下の音読連結記号の堅棒がA群はすべてあるのに対し、B群はすべて欠落。

○下巻十九丁裏九行目、最初の字「肥」の右上に「三」と細字がA群すべてに認められるのに対し、B群にはすべて欠落。

○下巻廿丁裏四行目、最初の字は「と」とA群すべてがあるのに対し、B群はすべて「と」と濁点がない。

○下巻廿一丁裏四行目、四字目「づ」右に同じ。

以上は、A群とB群との相違の顕著なものうち、その相違によって読みに支障の生じる可能性のあるものだけに限って十四例を挙げたものであるが、読みに支障の生じる可能性がまったくあるいはほとんどないと言えるが、字形に明らかに相違の認められるものを挙げると、この他に十四例を挙げることができる。ついで、この十四例中の三例だけに限って挙げてみよう。<sup>(1)</sup>

○上巻一丁表二行目、三字目の「や」は、A群はすべて其角の筆(板下は下巻の追加を除いてはすべて其角の筆になるものと考えられる)にしばしば見られる右肩の点が下になっているが、B群では現在のひらがなに見られるように上になっている。

○上巻十六丁表六行目、最後の字「舟」がA群はすべて、中央の縦画が横画の線までで止まっているのに対し、B群はすべて下まで突き抜けている。

○下巻九丁裏四行目、最後の字「筋」の中の「月」の字の横画の一画がA群はすべて欠落しているが、B群はすべてこの欠落が補われている。

A群、B群を比較して見るとき、第一に感じられることは、同一書体の文字であるが、B群はA群の書体のもつ線の太さの変化に乏しく、そのためA群のもつ佞屈性がなくなっているということである。上掲の相違点は子細に見て行くと気づくものである。以上のことからA群の版木消失によってその被彫によるB群の出現と考えられる。

A群は、上掲3の天理図書館綿屋文庫本Aおよび12の今泉本の上巻のみを除き、巻末の刊記に

寺町二条上ル丁

井筒屋庄兵衛板

とある。

B群は、刊記は三つに分けられる。その一は、

21の富山県立図書館志田文庫本および24の保坂氏本Aの

書林

井筒屋庄兵衛

板行

橘屋治兵衛

とある二店併記のもの。

その二は、14の天理図書館綿屋文庫本E、16の同G、17の早稲田大学図書館本C、18の同D、19の駒沢大学図書館本B、20の国文学研究資料館・蓬左文庫、22の西尾市立図書館岩瀬文庫本、23の西郷氏本、25の保坂氏本Bの

皇都諧仙堂蔵板

書林井筒屋庄兵衛

橘屋治兵衛

板行

浦井徳右衛門

とある三店併記のもの。その三は、13の東北大学図書館本、15の天理図書館綿屋文庫本Fの

大阪府下心齋橋通

小島伊兵衛

とあるものである。<sup>(2)</sup>

以上のうち、その出版年次の明らかに知られるものは、B群のその三で、「大阪府」とあることから、これは明治四年の廃藩置県後の出版と考えられる。B群はあとで述べるようにそのすべてが同一版木によるものと考えられるから、刊本『枯尾華』はA群からB群と再刻本に版木が移行したが、長く刷を重ねて明治初期まで刊行されていたことが知られる。

つぎにB群のその一、二店併記本を見よう。この刊行年次を知り得る手がかりが得られるものとしては、刊本『おくのほそ道』の出版経過がある。雲英末雄編『元禄版おくのほそ道』の解題によると『おくのほそ道』の刊本の明和版および寛政版Aとある刊本に同じく二店併記の書があり、前者には安永七年（一七七八）刊記の書（『奥細道菅菰抄』）の広告が載り、後者には「寛政元歳酉仲秋再板」の刊記があるとのことで、これらより見るに安永七年——寛政元年（一七八九）ごろを含むある時点の刊行のものではないかとの推測が得られる。

また、その二、三店併記本については、同書によると、寛政版Cとある刊本に、「寛政元年酉仲秋再板／諧仙堂 蔵板／洛陽蕉門書林」とあって、B群その二の三店併記がなされてあるとのことで、また諧仙堂は浦井徳右衛門で、この事実は「寛政元年『おくのほそ道』寛政版初版刊行後、文化五年（『笈の小文』の一例によってこれを示す）を経たある時点で、井筒屋が経営不振におちいり、多くの併書の版木が売りに出され、諧仙堂浦井がそれを購入したことを示している」とある。これらのことから、三店併記本は寛政元年——文化五年（一八〇八）ごろを含むある時点の刊行ではないかとの推測が得られる。



さて、このことは別に、上述の披見し得た『枯尾華』刊本のうちで、その出版年次を知る手がかりの得られるものに、もう一本、23の西郷氏本がある。同書の裏表紙の内側に書籍広告がある。この中で刊行年次の知られる最も後期のものは、『源氏物語評釈』（萩原広道大人述）の文久元年（一八六一）刊行である。かつ書籍広告の最後に「和歌御書物所 京都三条通堺町 出雲寺松柏堂」とある。ちなみに「出雲寺」の件もまた上述の『元禄おくのほそ道』解題に、『笈の小文』の諧仙堂蔵版が出雲寺に移った例としての解説があるが、このことはしばらくおき、もしこの広告欄が刊本印刷、刊行の際に入られたものとすれば、23の西郷氏本は文久元年以降の刊行となる。<sup>(3)</sup>このように見ると、B群のその二として一括した三店併記本は、上述の小島伊兵衛刊記本とあまり遠く離れない幕末までこの刊記の下に出版されていたものと考えられる。

いま、これらの事情を、諸刊本に見る刷りの仕上りの上でみてみよう。B群の二店併記本は、その刷りを見ると、三店併記本・小島伊兵衛本と比較してその仕上がりにおいてはるかにすぐれている。諸本を比較して明らかに見られる二店併記本とその他の本との相違の顕著な例を二つあげてみると、

○下巻十一丁裏三行目、最後の字、「水」の最後の二画が三店併記本は明確に書かれてあるが、他はすべて欠落。

○下巻二十五丁裏六行目、四字目「跡」の最初の点が二店併記本は明確に書かれてあるが、他はすべて欠落。

この例はこの二例の他に十六例を披見し得るが、これらはたまたま採取し得たもので、一層子細に検討すればさらに多数の例を披見し得ると思われるものである。これらにより、B群は、二店併記本が最も早く刊行されたもので、このあと三店併記本となり、小島伊兵衛本となったものという上述の事情の裏づけが得られる。

また三店併記本は九本を数えるが、これらの中にもまたそれぞれに相違が披見される。顕著な二例を挙げると、

○下巻一丁裏八行目の最後の二字「空華」の音連結記号が16・17・19・22が二店併記本と同様に明確に一本の棒となっているが、14・18・20・23・25は中間が切れてとくに23のかすが最も烈しく、しかも一層烈しいものに小島伊兵衛本が

あること。

○下巻六丁表五行目、最後の字「此」は14・16・18・19・20・22が二店併記本とほぼ同じ鮮明度を見せているが、17と25とはやややすれを見せ、23は最初の縦画はほとんど欠落し、かつこれと同じ状態のものに小島伊兵衛本がある。

この種の例をこの他に三二例を発見し得たが、<sup>(5)</sup>これらのことから23が最も後刷りの本であることが知られる。従ってその他の諸本は二店併記本と23との中間に位置することが知られる。しかし上掲の二例を見ても14・17・18が三例において二店併記本と23との中間位置が異なっており、23を除いた七本の位置を簡単に定めることは上述の三四例では困難である。ただこれら八本のうちに、二店併記本にきわめて近い位置にあるもの、また小島伊兵衛本にきわめて近い位置にあるものの存在は知られる。

#### 四

最後にA群にふたたび戻る。全部で十二本である。このうち3の天理図書館本Aは他がすべて半紙本であるのに対し、大本であり、また上巻のみである。また上述したように12の今泉本も上巻のみである。また11の国文学研究資料館・高岡中央図本は下巻のみである。

これらのうちにもまたそれぞれに相違が発見される。顕著な五例を挙げると、

○上巻二丁表六行目、七字目八字目の「れし」が3・4・5・6・9・12は二字が連結してとぎれがないが、1・2・7・8・10は一樣にとぎれを見せる。

○上巻三丁裏六行目、最後の二字「知利」の音連結記号の右側の棒線が3・4・6・12は明確に一線をなしているが、他は中間にとぎれが見られる。因みにB群の諸本はすべて消滅してしまっている点においてA・B群の相違の顕著な一例

とされ得るものであることはすでに述べた。

○上巻四丁表四行目、最初の字、変体仮名「へ」が、3・4・6は線のとぎれが見られないが、他のすべてにとぎれが見られること。因みにこれはB群ではとぎれがなくなり、小島屋伊兵衛本となって、またややかすれの見初めるものである。

○上巻七丁表八行目、最後の字変体仮名「て」が1・3・4・5・6・7・8・9・12には線にとぎれが見られないが、2には一部にとぎれが見られること。因みにB群ではA群に一樣に見られる最初の線の切り込みがなくなってすべてにとぎれがなくなる。

○上巻十丁裏六行目、六字目「蟻」が、3・4・6が、最も字画のくずれがすくなく、ついで9・12・1・2・5・7・8・10は一層の字画のくずれを見せる。

この例は、この他に二十例が発見され、これから見て、3・4が鮮明度において最もすぐれ、ついで6・12、という概略の結論が得られる。

つぎに下巻の四例を挙げる。

○六丁表五行目、最初の字「此」が、1・4・6・9・11は線のとぎれが見られないが、5・7・8にはこれが見られること。因みにこれがB群となると、再び明確になり、また23・13・15となると、とぎれが生じることについてはすでに指摘した。

○十三丁表一行目、最後の字「月」が、4・6・10・11は画のくずれがないが、1・9・5・8・7の順にくずれが烈しくなること。

○廿二丁裏二行目、句の最後の字「質」のふりがな「カタギ」が1のみで、4・5・6・7・8・9・10・11は濁点が落

ちて「キ」となっていること、因みにB群はすべて「キ」。

○廿五丁裏六行目、四字目「跡」は、字くずれの最もすくないものが、4・11、その他は一樣にくずれを見せている。因みにB群では二店併記本でふたたび元に戻り、また既述の順に字くずれを見せている。

この例は他に採取例が二のみで、<sup>(?)</sup>明確な判定は下し得ないが、廿二丁裏二行目の「質」の振仮名の件を例外現象と見るならば、4が最も鮮明度においてすぐれ、ついで6・11・1の順序となろうか。

## 結 び

刊本『枯尾華』は、A群の初版本および初版本と同一版本使用のものと、B群の覆彫りになる再版本と分けることができ。B群はさらに井筒屋・橘屋二店併記本とこれに浦井徳右衛門を加えた三店併記本と小島伊兵衛本とに分けることができるが、これらはすべて同一版本の使用と考えられる。このうち、小島伊兵衛本は明治四年以降、また三店併記本のうちの一本に文久元年以降まで刊行年次を下げた考えられるものがある。B群の上限の刊行年次はその一は、上述のように、安永七年——寛政元年を含むその前後、またその二は寛政元年——文化五年を含むその前後。またA群の上限は元禄七年（阿誰軒『俳諧書籍目録』）と考えられる。<sup>(8)</sup>

A群の版本消失によってB群の出現となったものと考えられるが、このために同一版本の長年月にわたる使用が中断されることになったものであろう。A群はすでに見てきたような版本の摩滅・損傷の推移は見られるものの、判読を困難とするほどのものにまでは至っていない。またB群は、これもまたすでに見てきたようなA群との相違を知らさえずれば、読みにおいての支障はない。ただ、A群の方が、板下其角の筆跡が一層よく窺われる事実はある。

なお、二、三の付載事項をつけ加えておく。その一、A群の中で、鮮明度において最もすぐれているもの、換言すれば版

本の摩滅による損傷度のすくないものは3の天理図書館綿屋文庫本Aで、上巻のみの存在であるが、他がすべて半紙本であるのに対し、これのみが大本であることは、市販本と別に刷られたものではないかと考えられ、最も初版本に近いもの一つとしてよいかと思われる。ついで4の同本Bが初版本に近いものとなし得よう。なお、「図説芭蕉」（岡田利兵衛著・角川書店）に、柿衛文庫所蔵の刊本『枯尾筆』の「上ノ一オ」および下巻の表紙が図版（二一七）の部に載る。「上ノ一オ」の図版を見るに、本稿のA群である。同書、図版解説の部に「大本二冊」とある。上述3と同じ存在と考えられ、上・下二巻本である点で、一層貴重存在とされ得る。

その二、上述のA・B群とはまた別に、編輯兼発行人 晋永機、明治廿六年十一月発行の刊記のある、二冊本がある。上巻が「元禄枯尾花上」、下巻が「明治枯尾筆下」の題簽をもつ、上巻はB群の追加以降を除いての覆彫再刻本と考えられる。また、延享四年、信州麦都房・武州長花房の識語を載せた『芭蕉翁終焉記』と題する、其角の追悼文だけを別人の手で彫り起した刊本がある。また同じ名でこれを再刻した「明治十九年孟秋刻成」とある覆刻本がある。なお、明治以降の活字本に岩波文庫『花屋日記』（追悼文のみ）、勝峯晋風編『其角全集』、日本古典全集一期『芭蕉全集後篇』、日本俳書大系『蕉門俳諧前集』、日本名著全集『芭蕉全集』、俳諧文庫『芭蕉全集』所載のものがあり、また注釈本として日本古典文学全集『近世俳句俳文集』（芭蕉翁終焉記）のみがある。

その三、23の西郷氏本の巻末の書籍広告を刊行時に同時付載と考えたが、これはあくまで推定ではある。原則としては考えられないことではあるが、二本の所有者が一本の破損部分をとって、他本とを合わせて新しい一本として所持することが時にないとは言えないからである。この種の本の存在は校合作業に、それが初期段階においてであると、大きく混乱を生じさせるものであるが、やがては気づかれるものである。23の場合はその種のものではないと考えられる。

注

- (1) 三例を除いた十一例をその箇所の指摘のみをしておく。上巻、〇二丁表四行目、下から二丁目「下」の書体、〇二丁表八行目、上から五丁目「一」同、〇二丁表八行目、最後の字「吟」同、〇四丁裏七行目、最後の字「尚」同、〇六丁表二行目、最後の字「止」同、〇六丁表八行目、最後の字「一」同、〇七丁表七行目、最後の字「し」同、〇十六丁裏三行目、最後の字「里」同、〇二十七丁表八行目、六丁目「笠」同。下巻、〇二丁表一行目、最初の字「一」同、〇二十二丁裏八行目、最後の字「圭」同。なお、これらの例は採取例をこれだけに限ったもので、一層子細に検討すれば、それによって比例的に増大するものと思われる。
- (2) 見返し三行木記、右に「芭蕉翁大人 全部二冊」、中央に「俳諧 枯尾華」、左に「大阪書林 文金堂梓」とある。また巻末は三店併記本の「皇都諧仙堂蔵板」の字のみ残され、他はない。なお、「大阪府下心斎橋通 小島伊兵衛」は、裏表紙内側の双行木記で、前に「和漢西洋 書籍発売所」とある。
- (3) 出版予告とも考えられるが、それにしても出版時点をそう遠く離れない前後と考えられよう。
- (4) 十六例、上巻〇六丁裏五行目、下から二・三丁目「たゝ」とぎれ、〇十三丁裏八行目、最初の字「と」同、〇十六丁裏六行目、最初の字「塩」の鮮明度、〇十九丁表六行目、句の下から三丁目「ふ」とぎれ、〇十九丁裏四行目、五丁目「汚」の送り仮名「シ」とぎれ、〇二十丁裏六行目、三丁目「眉」の送仮名「ヲ」同、〇二十五丁表一行目、七・八字目の「ちゝ」同（ただし、21はややとぎれ）。下巻〇三丁表三行目、二丁目「在」の横棒のかすれ（ただしこれも21のみはややにかすれ）、〇七丁表五行目、最初の字「あ」同、〇十三丁表五行目、最初の字「供」同（21のみかすれにかすれ）、〇十四丁表七行目、最初の字「午」の振仮名同、〇十六丁裏六行目、最初の字「つ」同、〇十六丁裏八行目、最初の字「に」同、〇十七丁裏八行目、四丁目「へ」同、〇二十二丁裏四行目、最初の字「草」同（ただし21はすこしかすれ）、〇二十六丁裏五行目、二丁目「先」同。
- (5) 三二例、上巻〇二丁裏二行目、最初の字「侘」の鮮明度、〇七丁裏七行目、下から七丁目「神」同、〇八丁裏三行目、句の下から二丁目「の」のかすれ、〇十丁表一行目、最後の字「を」同、〇十一丁表一行目、下から四丁目「す」同、〇十三丁表三行目、最後の字「と」同、〇十四丁表五行目、最後の字「湖」同、〇十四丁表六行目、最後の字「翁」同、〇十七丁表三行目、最初の字の右肩「ニウ」同、〇十七丁表七行目、最初の字「あ」同、〇十八丁表一行目、二丁目「に」同、〇十八丁裏一行目、最後の字「光」の最後のはね、〇二十丁表九行目、最初の字「寮」の鮮明度、〇二十丁裏六行目、三丁目「眉」の送及名「ヲ」同、〇二十丁表二行目、最初の字「傷」の送仮名「ソテ」同、〇二十二丁表一行目、二丁目「さ」同、〇二十七丁表二行目、最初の字「は」のかすれ。下巻〇一丁裏八行目、最後の二字「空華」の音連結記号の堅棒のかすれ、〇六丁表五行目、最初の字「此」同、〇七丁

裏五行目、二字目「ら」同、○九丁表四行目、作者名「山」同、○十丁表二行目、二字目「や」同、○十三丁表九行目、二字目「羽」同、○十八丁裏五行目、最初の字「か」同、○十九丁四行目、最初の字の右肩の「ニウ」同、○二十丁表八行目、最初の字「此」同、○二十丁裏五行目、最初の字の右肩「三ウ」同、○二十一丁裏三行目、二字目「の」同、○二十三丁裏八行目、句の下から四字目「つ」同、○二十五丁表四行目、二字目「く」同、○二十五丁表六行目、句の最後の字「哉」同、○二十六丁裏四行目、最初の二字「たゝ」同。

なお、本文にもこの後で述べているように、23が版木摩滅度において最も後刷本であろうとの推定が可能であるのみで、他の七本の二店併記本との摩滅度による位置決定は以上の事例だけからでは困難で、今回はこれを行うことを避けた。

- (6) 二〇例、○一丁表四行目、最初の字「地」のかすれ、○一丁表八行目、最初の字「折」同、○一丁裏八行目、十字目「緒」同、○二丁表一行目、最後の字「所」同、○二丁裏二行目、最後から二二字目「ひ」同、○二丁裏八行目、下から五字目「る」同、○三丁表八行目、最後の字「た」同、○三丁裏二行目、最初の字「得」同、○四丁表六行目、下から三字目「と」同、○四丁裏八行目、下から四字目「と」同、○五丁裏八行目、下から五字目「行」同、○五丁裏八行目、最後の字「も」同、○六丁裏一行目、下から三字目「し」同、○六丁裏七行目、下から六字目五字目の「かゝ」同、○七丁表七行目、最初の字の振仮名の鮮明度、○八丁表二行目、八字目「祈」のかすれ、○八丁表三行目、下から二字目「の」同、○八丁表三行目、六字目「ゆ」同、○八丁裏九行目、四字目「使」同、○九丁表三行目、二字目「そ」同。

- (7) 二例、○一丁裏八行目、最後の二字「空華」の音連結記号の堅棒の鮮明度、○十二丁裏六行目、句の下から二字目「鈍」の振仮名。

- (8) 本文で最も遅く成った作品は下巻の巻末に載る六七忌(十一月二十三日)の追悼歌仙である。これより三十五日後には出版されたものと考えられるから、非常に早い出版の一つと考えられる。初月忌(十一月十二日)の百韻に重勝(井筒屋庄兵衛と考えられる)が参加している事実が見られる。

付記 本稿は昭和五十五年度、日本近世文学会秋季大会において口頭発表したものに補訂加筆したものである。なお本稿の成るために、雲英末雄氏の編著なる『元禄版おくのはそ道』の解題に御世話になるところが多く、ここに厚く感謝の意を表したい。また本稿に限らず研究方法の側面においていろいろと御教示をいただいている井本農一先生、久富哲雄氏、西村真砂子氏に今回もまた書誌事項に関して多くの御助言をいただいた。これを機に厚く御礼を申し上げる次第である。